

▶▶▶加藤裕治

対面か、オンラインか

今月の初め、某学会が対面で開催される
とのことで、久しぶりに東京・目白にある
日本女子大学を訪れた。直接向き合って議
論する感覚は久しぶりだった。

本年度に入って、学会や研究会は対面
の開催が増加している。どこからでも参加
できるオンラインは、大きなメリットがあ
る。だが対面での学会は、やはりそれとは
異なる充実感がある。しかしなぜなのか。
いまひとつ言葉にできなかったのだが、今
回、あることに気付いた。

先の学会のメイン会場は、明治三十九年
に起源をもつ成瀬記念講堂だった。西洋の
教会堂を感じさせるその講堂へ向かい、開
会のあいさつがあり、議論が始まる。その
流れの中で、さあ今日はここで学会に参加
するのだという「構え」が自然に身体に湧
き上がってきたのである。

自宅からオンラインで学会参加する際
は、そもそもプライベートとの境界がはっ
きりしないので、かなり意識的に気持ちを
切り替える必要がある。一方、対面の場合
は、環境自体がいや応なしに、学会の世界
へと私を引き込んでくれるのである。

端的に言えば、家での勉強と塾での勉強
の違いであろうか。家での勉強は、サボリ
への誘惑を断ち切り、意識的に机に向かわ
なければならぬ。しかし塾へ行けば、そ
もそも勉強する構えにならざるをえない。

さて、学会や研究会では対面が戻りつつ
ある一方、世の中では逆のことも起きてい
る。つい先日、NIIが勤務地を原則自宅
にする新制度を導入し、テレワークの部署
を増やしていくと報じられた。

多様な働き方が可能になるのは朗報であ
る。だが在宅での労働は、プライベートと
仕事の分離を曖昧にする。そのため、主体
的に自分自身の働き方をコントロールする
必要がある。うまく切り替えができない場
合、メンタルの問題も現れてくるだろう。

また例えば、在宅ゆえに育児に対し保育
園利用などが不利になってしまっただけは本末
転倒だ。在宅勤務とは、企業経営だけの問
題ではなく、社会全体に関わっている。

(静岡文化芸術大学教授)